

云ふ大建造物をして、一層大ならしめ、一層光輝あらしめる爲めに、或人は一の瓦をそれに寄與する人もあるであります、一の土臺石を持つて來る人もあるであります、又一の釘丈でも持つて來て此文明と云ふ大きな建築物に寄與するのも宜しい、諸君は其一の仕事を分擔して居られると云ふことの、さう云ふ責任を感じ、さう云ふ希望を持ち、さう云ふ意味に於て、諸君は自重せられなければならないと思ふのであります。今日動もすれば此の日本人の排斥する爲めの割據と云ふやうな性癖あるに乗じて、純真なる所の諸君の頭を亂して、諸君を誤らんとするものが少くない。諸君は諸君の最も尊敬せなければならない、又諸君の今日ある其原因となつて居る所の祖先の遺業である、今日の社會、今日の文明、文明とか社會とか云ふやうなものは、是は他の動物にはない人類特有の現象である、その社會、その文明を護るに於て、諸君は十分の覺悟を必要とする。諸君は専門的の考を以て法律を研究せられるのは善いのでありますけれども、どうか常に此社會此文明と云ふものを濫りに毀損せざるやうに、専心努力されんことを切望いたしますのであります。以上甚だ簡單でありますけれども、願はくば、諸君は協力する爲めの分擔と云ふ精神を以て、専門的に益々法律を御研究あらんことを、切望して止まないものであります。

刑事補償法に就て

法學博士 泉 二 新 熊 氏

私の演題は唯今御紹介になつたやうに此度制定されました 刑事補償法に關することではありますが、時間も割に短いのでありますが一寸此際諸君の爲に一言祝福したいことがある、唯今控へて居りましてお話を聞いて居

ります際に法學會創立後十年になるといふことで、尤も今日は十週年記念の講演であるといふことも豫め承つて居りましたが、最近の一と昔のお話がありました、私は實は二た昔半位前にこちらに矢張り三四年間講義に参つたことがありまして、さういふ古い縁故を持つて居ります、其頃はまだ諸君はお生れにならなかつた方もあつたかも知れない、大分古い話でありますから一つのエピソードとして申上げるのであります、其頃には今のやうに電車などがあつた譯でなく随分不便でありました。私は四谷の方から通つて來るので毎週一回講義に出たのでありますが、私の擔任課目は獨逸刑法の講義でありました、其際に支那の學生で姚震といふ人が居りました、其人は非常に熱心に研究して居る人でありましたが、後日卒業して支那に歸つてから向うの大理院長即ち大審院長になり、程なく司法大臣にまでなつたのであります、私などはまだ司法省の参事官とかいふ時代に生徒の方が大臣にまでなつて居ることを見て驚いたやうな次第であります、其後支那の政變は御承知の通りでありまして、姚震氏も失脚して今では天津の租界に隱遁して居ります、私は丁度一昨年であつたかと思ひます、北滿北支地方を巡りました際天津で姚氏と面會しました、天津には其他にも本大學に學んだ人達が支那の人で澤山居るやうでありまして、一夕私と會しまして、如何にも其當時の師弟間の敦い美しい情誼の再現するのを見て私は非常に愉快に感じたのであります、今日は兎もすれば學校騒動があり、職員と學生との間に面白からぬ妙な關係が時々現はれるやうであります、是は誠に苦々しいことであります、此師弟間の美しき情誼關係といふものに依つてお互に發展し、母校愛といふものに依つて團結協力したならば、國家社會の爲にどれ位それが貢獻するか分らんであらうと思ふのであります、此法學會の目的等は各自の解釋に依る所であるといふお話を承つて居りましたが、私はどうか師弟間の友誼といふものを濃厚にして、此母校の爲又國家の爲にお盡しになる所の原動力となつて此會がお働きになる

やうにありたいといふ希望を述べて前途を祝福したいのであります。それだけを前以て申上げまして是から講演に移るのであります。

先づ此度制定せられました刑事補償法の沿革のことを簡単に申上げます。

歐羅巴諸國では一千八百八十七年あたりから佛蘭西の刑事訴訟法であるとか、其後諾威の刑事訴訟法であるとか、さういふやうな法制に賠償制度が認められました、それから一千九百五年以後獨逸、奧太利、ハンガリー等に此制度が採用されることになつたのであります、我國に於きましては矢張りさういふ趨勢に促されまして、大正十二三年の頃から民間に於てもそれぞれ冤罪慰藉に對する賠償制度を設くべしといふことに付いて議論が出て來たのであります、で司法省に於ては其頃から致しまして、さういふ要求に應ずべく再審に於て無罪の言渡を受けたる者及び未決勾留を受け無罪免訴の言渡を受けた者等に對する或る程度の補償と申しますか、賠償と申しますか、どちらでも宜しいのであります、補償を得しむるやうなことを目的とする所の法律を拵へやうといふので立案をして居たのであります、其後第五十七帝國議會及び其次の帝國議會に於ては議員の方から其種類の法律案が提出されたのであります、それは兩院を通過するに至らずして其儘葬られまして、此前の第五十九議會に於て漸く刑事補償法といふ法律が通過して既に公布になつた、斯ういふ沿革になつて居るのであります。

次に其法律が拵へられるに至るまでの國家賠償責任に關する觀念がどういふ風になつて居たかと云ふことを簡単に附いて申上げます。

従前は主權絕對論、國家高權といふものは絕對無限のものであつて、是が人民に對して賠償責任を負ふなど、いふ考は毛頭なかつたのであります、殊に封建時代に於ては申す迄もなく權力者即ち治者と被治者との間の關係といふものは、今日から見ますれば想像も出來ない程絕對的のもので

ありまして、權力者の欲する所總て如何なる氣隨氣儘なことであつても是が働くのである、其權力の前には人民の生命身體自由財産といふものは風前の燈火よりも尙ほ危かつたのであります、さういふ時代に於ては此權力者の爲したることが不法であるとか不當であるとかいふやうな觀念が起り得る餘地がなかつたのであります、従つて又之に對して賠償などいふやうな觀念も起る筈がないのであります、さういふ狀況である所に、第十八世紀に於ける法學に於ては餘程國家賠償といふ觀念には不利益な法律思想が普及して居たのであります、即ち法人擬制說といふものが學者の間に盛んに行はれたのであります、今日では法人は實在のものであると考へて居る。國家も無論法人であります、申す迄もなく所謂法人實在說といふものが今日では勢力を占めて居るのであります、十八世紀から十九世紀の末葉にかけての法學は法人擬制說で、法人といふものは實在のものではなくして法律が想像してさういふものを拵へるのであるといふフィクションであるといふ説であつたのであります、それで其法人といふものは適法な目的の範圍内に於てのみ存在するので、其目的の範圍を離脱すれば法人の存在なし、従つて法人は不法行爲を爲し得るものではないのだといふ考である、然らば法人の機關たる自然人が何か不法のことをしたならば其時には誰が責任を負ふかと言へば、實際の事に當つた自然人が不法行爲の責任を負へば宜しいのである、刑罰其他損害賠償にしても總て其自然人の責任であるので法人には其責任はないのである、斯ういふのが法人擬制說から出て來る所の結論であるのであります、此學說から申しまして國家といふ法人自らが賠償責任を負ふなどいふことは、さういふ觀念は一寸出て來ない、是が矢張り國家賠償制度の發達を遅々たらしめる所以であります、即ち其學說がさういふハンディキャップをなして居たものであると見て宜からうと思ふのであります、併ながら段々世の中が封建時代を去るに従ひまして、自由平等の思想は御承知の通りに佛蘭西革命以來段々發達

して來まして、諸國が今まで專制々度の國ばかりであつたのが總て皆立憲政治を行ふといふやうなことになつて來た、さうして所謂法治國の觀念が相當に發達して來たのであります、日本に於ても憲法が出來まして、人民の權利義務といふものは憲法上重要なものを擧げて之を認むることになつたのは御承知の通りであります、殊に所有權に關しては、帝國臣民は其所有權を侵さるゝことなし、公益上必要なる事項に付ては法律を以て其制限を爲すことが出來るといふ趣意の規定が出來て居るのであります、さういふことから致しまして、個人の所有權を制限するとか、或は所有物を徵收するといふやうな場合などに付ては必ず法律に依る、而も全く無償で所有權を取上げたり制限したりするといふことは憲法の精神に反するのでありますから、法律を設けて必ずそれには賠償を與へるといふことを明らかにすることになつて來たのであります、例へば徵發令といふものがある、軍事の必要の爲に個人の所有物を徵發する時には賠償を與へるといふことが徵發令に認められて居る、其外例へば土地收用法といふものがある、公益の爲に個人の土地を收用する爲に、又或は河川法、郵便法、電信法、色々公益の爲に個人の所有權を侵害する場合がありますが、それには皆相當の賠償を與へることの規定が出來て居るのであります、斯ういふものを學者は公法上の賠償と言つて居るのであります、即ち近世になりましたからは公法上の賠償といふ制度が相當に發達して來たのであります、從來の國家無責任觀念が幾分か打破され、國家も亦賠償の責任のあるといふ考が相當に認められて來つゝあつたのであります、併ながら今申しました公法上の賠償といふ制度は何等罪なき個人の所有權を公益の爲に制限したり徵收したりするといふ場合に限られて居るのであります、所が刑事補償とか刑事賠償といふ制度でありますと、兎に角犯罪を犯したる者としての嫌疑を受けて其責任を問ふべく法律に基いて手續が行はれた場合であります、さういふ責任を問ふ爲に行つた所の手續に或る間違があ

つたといふ場合に、之に對して國家が賠償補償を與へるかどうかといふ點は從來の單純なる公法上の賠償といふものと趣が違ふ、從つて此刑事賠償といふ制度は其他の公法上の賠償制度よりも餘程後れて發達して居るのであります。

併ながらよく考へて見ますといふと、實は刑事賠償といふ制度も矢張り一種の公法上の賠償制度であるといふ風に、少く共之に準じて考へることが出来るのであります、と申しますのは、犯罪の嫌疑ある者に對して其訴追及び裁判の手續をする者が國家の機關である、即ち檢事であるとか判事であるとか、此判事や檢事は自分の氣隨氣儘に何等の法規に依らないで勝手にやつて居るのではなくて、刑事訴訟法其他の法規に從つて、法規の命ずる所に從つて其手續を行つて居るのであつて、此手續を行ふことは即ち判事檢事の職權行爲であり職務行爲である、職權職務に屬する行爲は是は皆適法の行爲であつて、法律に基いて爲す所の職權職務に屬する行爲を違法のものとする事は出来ない、不法行爲とする事は出来ないのであります、其行爲が適法行爲であるといふ點に於ては、法規に基いて國家の機關が徵發を行ふとか收容をするとか、或は郵便電信等の必要の爲に個人の土地を強制的に通行するとか、さういふ行動と少しも異なる所はない、それから被疑者及被告人の側に付て申しますといふと、犯罪ありとの嫌疑を受けたといふ點に於ては、其出發點に於ては從來の公法上の賠償といふものと趣を異にして居りますが、結局する所は其人間には罪はなかつたのである、無辜の良民であつたのである、冤罪者であつたのであるといふことが手續の上に確定されましたならば、結局初めから何等の罪なくして所有權を制限されたり徵發されたりしたものと變る所がない、結果から見るとさういふことになる、最初の目的と出發點は一般の公法上の賠償と違ひますけれども、結果から見るといふと、詰り一方は法令に基いて職權職務を行ふのであり、一方は何等自分の罪なくして國家社會の秩序を維持する

といふ司法處分の爲に特別の犠牲を拂つたものであるといふことになる、だから公法上の賠償の場合に準じて考へることが出来るのである。

然らば公法上の賠償の基本觀念として、何故さういふ場合に賠償をするかといふと、總て國民の負擔は公平でなければならぬ、然るに公法上の賠償の場合を考へて見ますといふと、特定の人が特別の負擔を持たされる、國家公益の爲にさういふ特別の負擔を持たされる、そこで其負擔を國民一般に平均せしめるといふが爲には國民の納税其他國民一般の負擔から成立つて居る所の國庫の費用を以て賠償をするといふことが即ち其負擔の公平を圖る所以である、それと同じやうに此刑事補償の場合冤罪者は結局國家公益の爲に特別の犠牲を拂つたことになるのでありますから、それに對して補償を與へるといふことが即ち國民の負擔を平均する所以でありまして、公法上の賠償といふこと、其點に於ては少くとも類似のものであると考へることが出来るのであります、それから更に他の一面から見まして、賠償とか補償とかいふことを申しますが、民法上の不法行爲に依る所の損害賠償といふものと性質は全く別のものであるといふことが、公法上の賠償に付ても此刑事補償に付ても同様に考へられるといふ點が一致して居るのであります。

先刻申しましたやうに、公法上の賠償は決して國家が不法行爲をしたから、之に對して賠償をするといふのではない、法規に基く職權職務を行使したのであるが、結果に於て罪なき者に特別の犠牲を課したのでそれを何とか救済してやらうといふことが目的であります、國家の機關が不法行爲をしたから賠償をしようといふ考ではない、でありますから、其點が詰り民法上の損害賠償と異つて居ることは申す迄もない、御承知の通り民法上の損害賠償、殊に不法行爲に依る所の損害賠償は、故意又は過失に因つて他人の權利を侵害して他人に損害を加へた場合に賠償をするといふことが民法上の損害賠償である、又精神上の損害賠償も民法上認めて居ります

が、兎に角不法行爲を原因とする所の賠償である、而して公法上の賠償又之に準ずる所の刑事賠償はさういふ觀念は持つて居らないといふことが、根本的に私法上の賠償と異つて居るのであります。

それから刑事補償の制度を法律で認めるといふ此立法の基礎觀念に付きましては色々議論があるのでありますが、是はまあ考へ様に依るのであります、一方から申しますると今日の社會思想法理思想の進歩したる時代に於ては、假令國家機關の行爲は不法行爲なりといふことは出来ないにしても、兎に角罪なき者に對して勾留をしたとか、刑を執行したとかいふやうな結果の上から見れば不當な事實が茲にあるのですから、さういふ場合に之に對して賠償をするといふことは國家の義務である、法律上の義務であると考えべきである、従つて斯ういふやうな賠償をするといふことは國家の恩惠でもなければ、當然の法律上の義務として考ふべきであるといふやうな觀念を以て此立法の基礎を見て行かうといふ説があるのであります、併し一方から申しますといふと、それは法律上の義務があるものではない、例へば此犯罪者に對して國家が民法の規定の適用を受けて、民法の規定で當然に損害賠償をする義務があると見るべきかといふとさうは認むることは出来ない、如何に法律上の義務があるといふ議論をしましても、是は所謂公法上の賠償であつて、今の民法上の賠償とは其基礎が違つて居るのでありますから、賠償を認めようとすれば、どうしても特別の立法を必要とする、別に法律を拵へなければ民法の規定に基いて當然に賠償の義務があるといふことには解釋が出来ないのであります、是はどの説から言つても法律の解釋としては其結論は同じであります、さうしますると國家が茲に新たに法律を拵へるといふ其理由其動機は、今までのやうに冤罪者を其儘に放任して置くといふことは氣の毒であるからといふ仁義道義の觀念、又之を新たに救済する途を講じやうといふ一つの恩惠的の觀念に基く立法をしやうといふ考に存するでありませう、けれどもさういふ道

義的觀念から出發しても、放任して置くことの出来ない事柄を放任して置くといふことは今日の文化國家に於てどうしても許すべからざることであるといふ風に考へることは出来る、即ち國家道義上の觀念からそれは國家の義務であるといふやうに考へるとは出来る、斯くの如く是が道義上國家の義務であるといふ風に考へられるならば、國家が之を遂行するといふことは又法治上の義務であるといふやうに考へることも出来るのでありませう、で其考へ方は色々あると思ひますが、要するに新たに法律を拵へなければ補償義務を負担しないのであるといふ其結論はどちらにしても同じである、併し此法律を新たに拵へた後に於てはどういふことになるかと申しますと、矢張り國家が其法律に基いて賠償責任を負担することになる、それから冤罪者は此法律に基いて賠償請求の權利を得ることになるのであります、法律を拵へた曉に於ては國家と其冤罪者との間に公法上の法律關係が発生する、唯恩惠慈善の問題ではなくなつてしまふ、やりたければやるが、やりたくなければやらぬでも宜いといふことにはならない、法律の規定に基いてやらなければならぬ、一方は受取る權利がある、斯ういふやうなことになる譯であります。

それから此補償制度を採用いたします目的は先刻一寸申上げましたやうに、刑事手續に従事する判事とか検事といふ職員の過失の責任を糺彈するといふのが趣意ではない、官吏が其職務の執行に付て惡意を以て人民に損害を加へる、或は重大な過失に基いて損害を加へるといふやうなとがありますれば、それに付ては官吏に對しては國家の行政監督に基いて懲戒處分もするといふ道もあり、それからさういふやうに職權を濫用して不法なことをするといふ場合には、是は官吏がやつても一つの不法行爲として民法の適用がある、如何なる場合に官吏が職務の執行に付て不法行爲をしたと見るべきかといふ其問題の解決は、是は實際事實に依つて各場合に付て判斷をすべきでありまして一概に論ずることは出来ませぬが、若し職務執

行に際して職權を濫用して不法の行爲をしたのであるといふことが解釋せらるゝ場合に於ては、民法の規定に基いて官吏其者が不法行爲に付ての責任を負ふといふことは、是は承認せねばならないことであると思ふのであります、其點に付きましては殊に官吏の責任即ちどういふ場合には不法行爲ありと認むるかといふことも明らかにする必要がありますので、特別の立法をして居る所もあります、又我が法律でも、舊刑事訴訟法では特に判事、検事等の責任に付て惡意又は重大なる過失があつて、それで刑法上處罰されるやうな行爲をした場合には損害賠償の責任がある、其他の場合の責任は判事も検事も負はないといふ風の規定がありました、現行の刑事訴訟法にはさういふ明文は省かれましたが、大體の趣意は同じやうなことに解釋する方が正當でありませう、學理上から申すと……さういふ風に場合に依つては官吏が損害賠償の責任に任ずることもありますし或は懲戒處分を受けるといふやうなこともあるのでありますが、それは別の問題でありまして、此刑事補償法といふ法律に於てはさういふ職員の責任を糺彈するといふことは目的として居らない、即ち此補償法に於ては職員の故意過失があつたとかなかつたとか、さういふことは全く眼中に置かないで、所謂冤罪者といふ者の方に故意過失がないか、責任がないかどうか、全く自分の責任なくして、冤罪に因つて勾留されたとか、刑の執行を受けたとかといふ場合には、之に對して補償を與へやうといふことを目的として居るのであります、故に或る意味に於て此刑事賠償は無過失賠償であるといふことが出来るのであります、少くとも故意過失のあることを必要としない、即ち官吏に故意過失がある場合に於ても刑事賠償は與へられるのでありますけれども、又官吏に全く故意過失がなくつても刑事賠償は冤罪者に對して與へられるのであります、此意味に於て兎に角故意過失を必要としない賠償、即ち無過失賠償の一種であると考へて宜しい、其點から見ましても民法上の不法行爲に因る所の損害賠償と性質が違つて居るといふこ

とを注意すべきであります。

それから此刑事補償の法律關係は先刻申上げましたやうに、國家と冤罪者との間に於ける所の公法上の法律關係である、従前には國家が斯ういふ賠償責任の主體としての法律關係に立つといふことは原則としてはなかつたのであります、公法上の賠償の場合には矢張り國家が法律關係の主體になるのであります、併し國家其ものが賠償をするといふことは文字の上に遠慮して出して居なかつたのであります、徵發令であるとか、郵便法電信法などの規定を見ましても、例へば郵便官廳が賠償をする、電信官廳が賠償をするといふやうなことになるて居りまして國家が賠償するとは書いてない、併し郵便官廳電信官廳は國家の機關でありますから、それらが賠償するのは國家が賠償する所以で、實質に於ては公法上の賠償制度に於ては國家が一方の主體であることは認められて居つたのであります、今度の刑事補償法には第一條にはつきり國家が補償をするといふことを書いて居ります、斯ういふ風の賠償に付て國家其ものが其法律關係の一方の主體であるといふことを明示したのは今度が我が法律としては初めかも知れませぬ、そして此國家と冤罪者との間に此法律が出来た以上は、それは恩惠慈善の關係ではなくして、立派な法律關係が成立するといふことは先程お話したのであるが、其法律關係は此刑事補償法といふ公法上の法律關係であつて、民法に依つて支配される所の法律關係でないといふことも先程お話した通りであります、従つて此法律關係に基いて公法上の賠償を請求するといふやうな其實行の手續なども普通の民法上の債權債務の關係、損害賠償の關係とは同じやうには取扱はれないのであります、手續も極く簡單であります、無罪免訴の言渡をした裁判所に對して請求をする、裁判所で賠償の理由ありとしたら賠償を交付するといふ裁判をする、それに基いて國庫から拂渡を受ける、斯ういふことになるのであります、若し請求を却下した場合には抗告する途がある、それも矢張り刑事訴訟法の規

定に準じて解決することになつて居るのでありまして、民事訴訟法の規定に基いて解決することにはして居ないのであります。

それから補償の實體であります、何に對して補償をするのであるかといふことが第一の問題であります、法律には刑事手續上未決勾留を受けて後に無罪免訴の言渡を受けたる者及び再審の手續に於て無罪の言渡を受けたる者に對して國家が勾留に因る補償、それから刑の執行に因る補償、もう一つ拘置に因る補償、さういふ補償を爲すといふとを規定して居るのであります、そこで何に對して補償が行はれるのであるか、其賠償或は補償といふ言葉に付ては色々議論がありますが、私は別に賠償といふこと、補償といふこと、意味は違はないと思つて居ります、議會では其點に附て大變議論がありました、賠償と補償とは大變意味が違ふものだといふ議論がありました、其賠償といふこと、補償といふこと、の間に實質上の區別はない筈であります、唯先刻申したやうに民法上の損害賠償といふ制度と今度の補償制度は目的も違ひ、總ての性質も違つて居るのであるから、民法上の損害賠償といふ觀念との連想に依る誤解を避ける爲に、寧ろ補償といふ言葉を以てする方が宜からうといふ位の簡單な理由から賠償と言はないで補償といふ言葉を使つたに過ぎないやうであります、だから私は賠償と言ひ或は補償と申して居りますが、其間に何等の區別はないものと御聴取を願ひます、そこで何が補償の目的物であるかといふことが問題であるのであります。

歐羅巴諸國の刑事補償法では勾留とか刑の執行に因つて冤罪者が蒙りたる所の財産上の損害を賠償するのであると法律に書いて居るのであります、我が補償法には其事は何とも書いてない、唯勾留に因る補償を爲す、刑の執行に因る補償を爲す、さういふ書き方であります、そこで詰り勾留を受けた者、刑の執行を受けた者は名譽上、身體上、財産上の不利益を蒙つて居る、それが非常に苦痛である、其苦痛を實質とする所の精神上

の損害を賠償するのであるといふ風に考へることも出来るのであります、其冤罪者に對して補償を與へるといふことは觀念の上から制度の上から致しまして文明國としてはどうしても避けることの出来ない制度であるといふ風に考へることが出来るのでありますが、併ながら國家財政の緩急の状態に依つて考へて見まして、總ての損害を賠償するといふことが出来れば結構であるが、それが出来ない場合には或る標準に基いて、或る制限の下に補償をするといふのでも結構であらうと思はれる、そこで今度の法律では勾留であるとか刑の執行を受けた者に對しては一日五圓以下の補償を與へるといふことに制限したので是は已むを得ぬことである、其五圓以下といふものは場合に依つては財産上の損害の賠償にもなるのである、例へば今日日傭取をして居る勞働者が罪なくして勾留を受けたとか懲役にされたといふやうな場合から考へて見ますと、一日に二圓とか三圓といふ位の賃銀を得る人達でありますから、其財産上の損害はそんな程度で済むかも知れない、それに對して偶々五圓といふ賠償が與へられる、さうすると財産上の損害を超過する所の補償が與へられるといふやうなこともあり得る譯であります、故に財産上の損害を賠償するのであるといふ觀念を以て説明することも出来るものではあります、併ながら場合に依ると到底一日五圓では話にもならないといふやうな財産上の損害を受けるといふことも考へられるのであります、さういふやうな場合に對して財産上の損害を賠償するのだといふことになりますと到底五圓では間に合はない、而も財産上の損害を賠償するのであるといふ看板だけを大きくして、そして實際は五圓以下にしか財産上の損害が賠償されないのだといふのは所謂羊頭を掲げて狗肉を賣るといふやうな譏りを免れないので、一層はつきり五圓以下、それ以上は今の所出来ないといふやうにはつきりして置くことが宜からう、而して之を財産上の損害の賠償と言つても宜いかも知れぬが、寧ろ精神上的損害賠償であると言つても宜いぢやないか、民

法の七百余條に依る損害賠償は通俗に之を慰藉料と唱へて居ります、裁判には慰藉料請求といふやうなことを申立て、來るのであります、慰藉といふ言葉は財産上の損害を賠償する場合でも用ひられることは考へられ得るのであります、殊に精神上の損害を賠償するといふなら慰藉といふ言葉で宜しいであります、議會では政府が慰藉といふ言葉を此法律の提案の際に使つたことを非難し、そんな慈善恩惠の思想に基いた立法は御免蒙るなど、いふやうな議論が大分ありました、併し慰藉といふ言葉を使つても損害賠償であるといふことを理解するに於て差支ないものと私などは考へて居るのであります、考へ方は唯今申したやうに財産上の損害を賠償するのであるとも、或は精神上の損害を賠償するのであるとも、そのどちらにも考へられる、又或る程度まで兩方併合して居るものであるといふ風に考へることも出來ます、兎に角法律には財産上の損害を賠償するとも、精神上の損害を賠償するとも書かれてない、唯勾留に因る補償をする、刑の執行に因る補償をする、そして一日五圓以下と書いて居りますから、何が補償されるのであるかといふことは自由にあの法律を解釋する人が思考し得る餘地は残つて居るのであります、尙ほ罰金の言渡を受け、それを既に納付したが再審に於て無罪になつた、さういふ場合には納めただけの罰金を返すといふことも認めて居るのであります、其場合などははつきり財産上の損害賠償だといふことも出來ないことはないかも知れませぬが、それでも本當の財産上の損害賠償ならば既に納附されて數年を経過して居る罰金に對して利子でもつけて返さなければ本當の財産上の損害賠償にはなりますまい、納附額と同一金額を還附すると云ふは寧ろ精神上の賠償であるといふやうな見地から考へることも出來ないことはなからうと思ふのであります。

そこで此法律では勾留を受けた者が無罪になる、それから刑の執行までされたが再審で以て無罪になつた、斯ういふ身體上の苦痛財産上の苦痛の

伴つた場合が一番苦痛の甚しい場合であるから、一番甚しい場合から先づ救済しやう、斯ういふ考に立脚し、勾留されずに起訴されてそして無罪になつた、斯ういふ場合には是は名譽の上から見るといふと矢張り其人は苦痛を蒙つたに違ひない、併ながら其名譽上の苦痛の外、それに加はるに勾留とか刑の執行といふやうな有形的苦痛は伴つて居らないから、此法律では補償しないといふのであります、それでは例へば罰金に處せられて居つた者が再審で無罪になつた、或は未決勾留を受けないで無罪免訴の言渡を受けたといふ者に對しては何等の慰藉方法がないかといふと、それも矢張りあることはある、即ち再審で無罪の言渡があつた場合には官報なり新聞に再審で無罪になつたといふ公告をするといふことは古くから刑事訴訟法で認めて居つたのである、之に反して普通の手續で無罪免訴になつた場合、是は勾留が伴つて居なければ其公告をするといふことは今度の補償法でも認めて居りませぬ、けれども是から刑法を改正する、刑事訴訟法を改正するといふ場合にはさういふ者も矢張り公告をする途は開かれる筈であります、尤もさういふ特別な場合には官報の官廳事項欄に無罪の言渡のあつたことを掲載するといふことを妨げないのである、それ等は金がかからぬことでありますから隨時出来ることであります。

それから如何なる人が補償を受けらるゝのであるかといふ點であります、唯今までは勾留を受けて無罪免訴の言渡を受けた、それから刑の執行までも受けたが再審で無罪になつたといふ者が、其補償關係の一方の主體である即ち補償を受ける所の主體、受償主體であるといふ立場からお話を申上げたのであります。其點に付てもう少し詳しく申上げて見ますと、檢事が犯罪ありとの嫌疑を以て起訴した、其起訴をしても勾留をしない場合もありますが、其被告人が逃亡をする虞がある、或は罪證湮滅をする虞があるといふ場合には未決勾留をします、未決勾留をして調べて見たが、結局其人の嫌疑を受けた所の事實は犯罪にならない、又最初嫌疑はあつたが

よく調べて見ると、犯罪ありとの證明が出来ない、斯ういふ場合には無罪又は免訴になる、豫審では免訴をする、公判に行くと無罪の言渡をする、其言渡を受けた者が受償主體である、又裁判が確定して、有罪となつたが再審に行つて無罪の言渡を受けるといふ場合も稀にある、確定判決をひつくり返すことは滅多にありませぬが、極めて嚴格な條件の下に於ては再審といふ手續が行はれます、其再審の手續で無罪の言渡を受けるといふことがある、其者も此法律に依つて補償を受けるといふことになる、再審は、既に刑の執行を終つてから後に行はれることもあれば判決は確定したがまだ刑の執行を終らない前に行はれることもあり得るのであります、大抵の犯罪は有罪判決が確定すれば刑の執行を直ちにするのが普通であります、然るに死刑の執行に付ては有罪判決が確定したらそれを検事の方から司法大臣に上申しまして、司法大臣が調査の上執行して差支ないと認めたならば執行命令を出す、其司法大臣の執行命令が出て初めて死刑が執行される、それが出るまでは死刑の執行は出来ないのであります、司法大臣が調査をする爲に場合に依つては六箇月、一年、或は二年もかゝるやうなことがあります、場合に依つては數年もかゝるやうなこともある、刑法の第十一條に死刑の確定判決を受けた者は其執行に至るまで監獄に之を拘置するといふことが書いてあります、其拘置が數年に互る場合が稀にはあるのでありますが、所が其間に再審の手續があつて終に其死刑の判決が破棄されて無罪になつて仕舞ふなど、いふことはさう滅多にないことでありますけれども、制度の上からはあり得ることになつて居るのであります、さういふ場合には、死刑の確定判決を受けた者でも再審で無罪になつて補償を受けることが出来る、斯ういふことになるのであります、それから若し既に刑の執行を受けた者が死んで仕舞つた、或は未決勾留を受けて無罪免訴の言渡を受けたが其本人が死んで仕舞つた、斯ういふ場合には賠償關係は消えるかといふとさうではない、其遺族の一人が補償を受けることが出来

るといふ關係になつて居るのであります、以上のやうな要件があるのでありますから、起訴はされたけれども勾留を受けなかつたといふ時、是は此法律に依つて補償は與へられない、名譽上は非常に不利益を蒙つて居るのではあります、まあ裁判といふ機關で公けに無罪免訴の言渡をしたと言へば、是は形式的に名譽を回復する所の方法であると考えより外に仕方がない、尤も前にお話しましたやうに將來刑法、刑事訴訟法の改正に依つてさういふ場合にも無罪免訴の公告をするといふやうなことはなるであらうと思ひます。

それから裁判に依つて無罪免訴の言渡を受けた者に限るのでありますから、よくありますやうに檢事が起訴猶豫の處分をしたとか、或は初めは嫌疑はあつたが今では嫌疑は全く解かれたから不起訴にした、さういふやうな程度では刑事補償法は適用はない、それからもう一つ、違警罪即決例に依つて警察官廳で即決の言渡をして勾留をするといふことがあるのであります、さういふ者に對する救済方法は此法律では出来ない、それから此法律は唯今申したやうに刑事の裁判に付てだけの問題で、民事の裁判で敗訴したが再審等の手續に依つてあべこべに勝訴になつたといふやうな場合があります、此法律の適用はない、其意味に於て刑事補償法であるのであります。

以上申上げたのは補償を受け得る主體に付てお話したのであります、併し尙ほ茲に一つの條件がある、それは成程無罪にはなつた、無罪免訴にはなつたけれども勾留をせられ或は起訴をされるといふことに付て本人が故意又は重大なる過失に基いて其勾留又は有罪判決の原因の一つを作つたと見らるゝ場合があります、是は減多にないことかも知れませぬが、斯ういふやうな場合が問題であります、例へば犯罪人が發覺しない中に自分が犯罪をしましたといふことで自首をするといふ場合があります、此自首は本當の自首の場合もあれば、又時々は虚偽の自首があるのであります。

す、本當には犯罪をしない者が自分は犯罪をしたといふことを自首して來ることがある、而して其僞虚の自首には色々な動機がありますが、まあ普通の場合を考へて見ますと博徒社會に於て親分子分の關係で、親分が博奕をやつたのだが親分を庇ふが爲に私がやりましたと言つて身代りに自首をして來るといふやうなことがある、それから又前に大きな犯罪を犯して居つて、其嫌疑の對象となることを避けるが爲に軽い犯罪を拵へて、自分は斯ういふ犯罪をしましたと自分がやつても居やしない犯罪を申告して來るといふこともある、其他色々な理由で虚偽の自首をするといふやうな場合がある、さういふ場合に實驗上に於ても終りまで判らず、刑の執行が済んで仕舞つてからあれは虚偽の自首であつた、本當の犯人が別にあるといふことが判る場合が時にある、自首に基いて起訴されて有罪の判決を受けて刑の執行を受けたといふやうな場合を考へますと、是は本人が故意に勾留とか刑の執行の原因を作つたものであるといふ風に考へることが出来る、其他本人の故意又は過失に基く所の行動が勾留であるとか刑の執行の一つの原因になつたといふ場合があると考へられることは随分あり得ることであり、併しさういふことに付てお話しして居りますと時間がありませんからそれは略しまして、本人が故意又は重大な過失があつたといふ風な場合には補償を與へないといふ制限があります。

それからもう一つは其行爲は無罪になつた或は免訴にはなつたが、性質上から見て公けの秩序善良の風俗に反することが著しいものであるといふ風に見られる場合もある、是も大變議會では議論になつたことであります、殊に大山郁夫氏の如きは其規定を見てそれは方法上のトリックだ、トリックを設けた案であつて、成るべく補償を與へないやうにといふトリックだといふやうな批評までされたのでありますけれども、さういふ惡意は少しもあの立法にないのであります、特に其點に付て申上げて置きたいとは、さういふ特別の場合及び無罪にはなつたけれども、事實はあるといふ

場合もあります、或は人殺しをしたといふ事實がある、其人は氣狂であるが爲に無罪の言渡を受けた、十四歳未満であるが爲に無罪免訴の言渡を受ける、併し人殺しをしたのは事實だ、さういふ場合がある、さういふ場合には賠償を與へない、兎に角さういふ社會に迷惑を掛けた事實があれば賠償を與へない、それ等の制限があるのであります。

もう一つ注意すべきことは外國の立法例の中には斯ういふことがあります、無罪免訴になつても嫌疑が完全に消滅した、全く無嫌疑になつたといふ場合、又犯罪に付ての責任が全くないといふことが證明された場合に限つて賠償を與へる、斯ういふことを書いて居る所がある、さういふ立法に依りますと裁判所が無罪免訴の言渡をしても何だか疑はしいから賠償はやらぬ、斯ういふ風に簡単に片付けることが出来る、先程申したやうな條件即ち故意があるとか重大な過失があるといふことに付ては格段の根據ある事柄がなければさういふ判斷は出来ない、又公序良俗に反すると云つても根據ある事實を持つて來なければさういふ判斷は出来ない、然るに只まだ疑が少し残つて居るといふのではどんな理由で疑が残つて居るかといふことを言ふ必要もないので、裁判所は疑はしい所があるのだらうけれども無罪にしたのだから、無罪の言渡を受けた以上はそれを有難いと思つて居れ、賠償などは以ての外だといふて追拂ふことが極めて簡単に出来る。で運用法がさういふことになつて居る爲であるかどうか知れませぬが、表看板が立派に一切の財産上の損害を補償するといふ規定は設けてあるに拘らず、其立法が行はれて二十數年に至る今日に於てもまだ此賠償法の適用のあつたとは殆んどないといふ國もあります、さういふ所から見るといふと今の規定で大抵賄つて居るのではないかと想像が付くのであります、併ながら本當に此國家が道義觀念に眼覺めまして、本當に無實の罪になつたとか、自分に特に不都合なものもないものに對して無罪免訴、犯罪の證明がないから罪にならぬといふ宣言をした以上は之に伴ふ當然

の結果として補償を與へるといふことにしなければ、今お話しましたやうに無罪免訴の言渡をして置くけれども、何だか疑はしいからやらぬぞといふので片付けて仕舞ふといふのでは、本當の道義的觀念に眼覺めたる立法の精神に基く運用は出來ないのである、さういふ立場から私達は今度の法律を拵へるに付て、さういふ條件を特に排斥し、且つ其點から見まして眞に與ふべき原因のある場合には補償を得しめる、眞に其無實の罪に泣く者を救済するといふ道義的の觀念に眼覺めた法律であつて、トリックは少しも用てない法律であるといふとを了解して貰つて宜からうと思ふのであります、尙ほ色々の點に付て議會では問題になり又色々の批判も行はれたのでありますが、其批判は、之を要約して見まするといふと、まだ此刑事補償法では不完全であるからもつと完全なものにして、財産上の損害の一切を補償することが出來るやうにする、其外勾留は受けなくても起訴されて無罪になつた者にも總て賠償を與へよとか、それから警察處分に對しても補償を與へよといふやうな要求を將來に於て満足せしむることが出來る完全な立法にせんことを望むといふ希望、それから今日でもそれがさういふ風に完全になつて居ないのは遺憾であるからといふ見地からしたる所の攻撃等色々あつたのでありますが、此等は將來適當の時期に於て解決せらるべき問題であります。

大體の概念は以上お話したことに依つて御理解になつたと思ひますからこれを以て御免を蒙ります。